

## 黒嶽の白水

昔、阿蘇野の村に一人の獵師が住んでいました。ある時、いつものように獵に出ましたが

夜になってしまい、黒嶽で道に迷ってしまいました。

どこか家はないものかと捜していると、遠くに灯りが見えたのでそっちの方に行くと家が一軒ありました。

中を見ると爺さんがいたので、獵師は

「暗くなって道に迷ってしまったので一晩宿を借りたい。」と頼みました。

さんは「今晚は色々とりこみ中で無理だが、まあよからう。

その代わりにのぞき見することはならんぞ。」

といい、泊めてくれることになりました。

獵師は鉄砲と犬を木にくくりつけて家に入ると、爺さんは

「食べ物はないからこれをやろう。水一杯飲めば腹一杯になるぞ。」

獵師は貰った木の実一つを食べて横になりました。

\* \* \*

夜中になってふと気づくと、餅つきの音が聞こえてきました。

はじめはじっと聞いていましたが、とても賑やかだったので

とうとうたまらなくなって約束を破ってのぞき見をしてしまいました。

なんと、天狗達が集まって餅をついていたのです。

つく者、餅をちぎる者、がやがやと楽しそうに話し合っていました。

獵師はとても驚きましたが、何も見なかった振りをして、

そのまま眠ってしまいました。

朝になって、また爺さんから木の実を一つ貰って食べました。

満腹したので、そろそろ村に帰ろうと思ったところ、

さっぱり方角の見当がつきません。

しかも、木にくくりつけた鉄砲は錆び、

犬は死んでカラホネ(白骨)になっていました。

獵師はびっくりして爺さんに尋ねると、

「そりゃそうだ。お前は一年間も眠っていた。

約束を破ったからだ。もう家に帰れ。」

と言われました。しかし、村に帰る方角がわかりません。

「それじゃ俺が米のとき汁を流すからそれに従って帰れ。」

獵師はお礼をいって米のとき汁に沿ってなんとか村に帰りました。

そして自分の家に帰ってみると、親戚が皆集っていました。

何事かと尋ねると、

「この家の主は獵に出たきり一年も帰らないので、

死んだものとして葬式をとくに済ませたのじゃ。

今日はムカワリの法事で集まっている。」

というのです。

髪は伸びほうだい、髭ぼうぼうで別人のようになっていたので

皆は獵師本人だということに気がつかなかったのです。

そこで、風呂に入ったたり身を整えたところ、やっと本人だと認められました。

\* \* \*

獵師がたどった米のとき汁。

地中にしみ込んだ、その米のとき汁が

白水鉱泉として湧き出したということです。